



『色づきはじめて山々を眺めながら  
子どもの育ちを考える秋の夕暮れ。』



理事 今野 徹

街路樹の葉が美しく色づく紅葉。この原稿が掲載される頃には、東京の都市部でも既に終わってしまっているでしょうか？

原稿を書いている今、東京の西の外れにあるあきる野市では、このところの寒さで山々が色づきはじめ美しい紅葉の季節を迎えようとしています。

新緑の季節の山々の色＝緑のグラデーションは、とても美しく、新しい生命の息吹を感じられ、なんとも言えない期待感を抱かせるような風景で、もちろん大好きなのですが、厳しい冬を目前にし、まるで命を燃やすようにして美しい色に染まっていく秋の山々の景色の方に魅力を感じてしまうのです。赤や黄色に彩られた木々の葉、緑色のままの針葉樹たち、それらの多彩な色がちりばめられた自然が作り出す芸術作品とも言える風景は、一日中見ても飽きることはありません。

私たちの園では、モンテッソーリ教育を実践しています。モンテッソーリ教育の中の要素の一つに、視覚、触覚、聴覚、味覚、嗅覚という五感を発達させ洗練させ機能化していくことを目的とした「感覚教育」があるのですが、31種ある感覚プログラムの中で私が一番好きなものに「色板」というプログラムがあります。「色板」とは、視覚の中でも色彩感覚に特化したもので、導入から展開まで3段階の構成になっており、その中でも第3段階の「色板Ⅲ」というプログラムが、私はとても大好きなのです。赤、青、黄、橙、緑、紫、茶、灰、桃という9色が1色につき7段階の濃淡のついた板、合計63枚を使って活動するのですが、各色の7段階の色のグラデーションがとても美しく、子どもが、63枚全てを使って作る「色の絨緞」などは、このプログラムの直接的な目的である「色彩感覚の発達」を超越し、まさしく芸術作品のような美しさなのです。

「紅葉した葉を使って、色板をしたら面白いと思わない？」と、ある大先輩のモンテッソーリ教師に言われた事がありました。その時私は、まさに「目から鱗」の心境でした。それ以来、秋の山々を見る度に、私はこの「色板」のことを思い出すのです。

山々を鮮やかな色のグラデーションで飾ることが出来る「自然」も天才ですし、洗練された五感で環境とつながりながら表現することが出来る子どもたちも、また天才です。私たち保育者は、この天才たちに囲まれて、日々生きられることに幸せを感じ、そして、この天才たちの育ちを決して邪魔をすることなく、全力でサポートしていかなければいけない。色づきはじめて山々を眺めながら、そんな決意を新たにしたり、秋の夕暮れでした。